

句読点をあまり使用しなかった人もたくさん居た。

また、全体が主格でなくても、書き出しの部分だけ主格で書き、後は奪格を使用した短文を付けるやり方がある。この場合の奪格は「性質の奪格 (casus ablativus qualitatus)」と呼ぶ。

主格+奪格の構文を繰り返す事により、次のような形になる。

Planta perennis, caule 10—20cm alto, radice longa, atrobrunnescente. Folia radicalia magna, longe petiolata, petiolo alato, piloso, 5—7cm longo, lamina elliptica, 5—7cm longa, 3—5cm lata, supra viridi, glabra, subtus glaucina, pubescente, foliis caulinis sessilibus, subrotundatis, utrinque toto glabris, margine serrulatis. Inflorescentia corymbosa, flore 5—7mm longo, 4—6mm lato, calyce infundibulari, ca. 3mm longo, apice 5—dentato, corolla urceolata, caerulea vel purpureocaerulea, toto gabra, apice 5—dentata, staminibus 5, 1.5—2mm longis, pistillo uno, ca. 2mm longo, ovario uniloculari, stigmate capitato. Fructus capsularis, globosus, ca. 1cm longus et latus.

前回解説した特徴記述に加えてここにあげた3形式の記載文のいずれか一つを付ければ、植物新分類群のラテン語記載文としては十分である。更に、詳細な部分記載については現代語 (なるべく英語が望ましい) で書けば良い。

(2) 奪格を主にした記載文

この形式の構文を良しとして、好んで用いる人が

多いが、結局(1)で述べた「性質の奪格」を使用して書き出す事になるので、主語は、これから記載・命名しようとしている新分類群そのものの新学名である。従って、主語の性は、属 (genus) の性になる。

もしも、属の性が男性または女性である場合には、記載文は次のように書ける。

新分類群の学名, sp. nov.

Perennis, caule 10—20cm alto, radice longa, atrobrunnescente, foliis radicalibus magnis, longe petiolatis, petiolo alato, piloso, 5—7cm longo, lamina elliptica, 5—7cm longa, 3—5cm lata, supra viridi, glabra, subtus glaucina, pubescente, foliis caulinis sessilibus, subrotundatis, utrinque toto glabris, margine serrulatis, inflorescentia corymbosa, flore 5—7mm longo, 4—6mm lato, calyce infundibulari, ca. 3mm longo, apice 5—dentato, corolla urceolata, caerulea vel purpureocaerulea, toto glabra, apice 5—dentata, staminibus 5, 1.5—2mm longis, pistillo uno, ca. 2mm longo, ovario uniloculari, stigmate capitato, fructu capsulari, globoso, ca. 1cm longo et crasso.

ラテン語も練習して書き慣れれば決して難しいものではないので、どんどん挑戦していただきたいと思う。終わりに、ここに連載させていただいた解説を基礎にした拙著「植物学ラテン語辞典」の中の例文について、ご意見をお寄せ下さった京都大学理学部植物学教室の永益英敏氏に御礼申し上げる。

(続く)

〔新刊紹介〕 正宗巖敬「日本の自生蘭 写真と図第三・四集」 変形判 (29×22cm), 51・69頁。自費出版, 昭和62年3月・12月, 7,000円・10,000円。

本誌18号と20号にご紹介した一・二集の続編で、三集には、オキナワチドリ、ハクサンチドリ、ウチョウラン、カモメラン、ナゴラン、ヒメホテイラン、ホテイラン、ヤクシマヒメアリドウシラン、クモキリソウ、ジガバチソウ、キエビネ、トキソウ、コラン、イチョウラン、ナリヤランの14種1変種、四集には、エビネ、タカネ、アマミエビネ、サルメンエビネ、ツチアケビ、カゲロウラン、アオキラン、レブンアツモリソウ、ミヤマウズラ、ユウコクラン、マツラン、カンランの12種が載っていて、終わりに一・四集の和名・学名索引がある。写真が一段と鮮

やかで、細部の状態がよくわかる。古典の引用も楽しく、記載文にもご自分の長年の観察・栽培結果なども盛り込まれている場合があって、日本のラン研究には不可欠な好著であろう。(H. T.)

〔植物ニュース〕 125. ツルガシワ *Cynanchum grandifolium* Hemsl. var. *nikoense* (Maxim.) Ohwi

1987年8月19日釜無川の本谷の右岸で採取。諏訪地域では初採。花期は過ぎていて果実となっていた。杉本目録では「温帯山地の林下に稀。霧積山、荒舟神津牧場方面の報告あるも県内か否か不詳」とある。「佐久の植物」では、馬坂、相木、荒船などの林下とある。植研のチェックリスト1984年版にはのっていない。(今井建樹)